寫生畫
上

鶚軒文庫
第六架
第一段
第八行
壹部二冊

小川先生著

養生囊 全

東都發行 千鍾房梓

養生囊序

凡そ生(イキ)としいけるものゝ衆(オヽキ)多が中にも靈かるものは人なり。最もたときものは命なり。人皆命は重き事をしりて命を養ふの法をしらず。古しへ世中にはありさまをかんがふるに。貴(タカ)きも賤(イヤ)しきも多くは養術に暗(クラ)く。湯藥(クスリ)を用ひ針(シン)灸(キウ)と施(ホドコ)しをみも法に叶ふ事のみ多く。

命の限りを盡さぬ人はびさしく偏に
醫師の良拙をわきまへ得ざるが故なるべし。
誠に歎かしき事ならずや予醫員の家に
生れぬれど。療病の術未熟にして其術をなら
ぬは常なれど幸に先考の修諭をうけぬ。
今此養生の書を作り。ちかごろ庸醫の
奇術を誹せず。敢て人と競爭するにあらず。
ただ世の人〳〵のかしこく醫の良拙をも辨ゆる
便ともなれかしと。希ぬるは予が筆の鈍く亂れ
いやしき故をもてゆるせよるとかく此に
帰

安永二年癸巳十月

東都處士
小川顕道書

養生嚢巻之上

薬といふものは。皆毒物にして平日嗜物に
あらず。病に攻られて苦しむ時。止事を得ず
病邪を駆に用ゆる物なり。今世の人は身を
養ふの物とおもひ。持薬などとて日毎に
薬を服し。却る身をそこなひ。世をはやく去る
人多し。たとへば兵は国家を治の徳あれども。
又人を殺の害あり。人を救の害あるゆへに国
家を治の徳あり。故に古人も薬を用ゆるは

兵猥用ふ[illegible]しといへり。千金方に曰。人体平和ならば只養なひをよくも食し。みだりに薬を服する事なかれとなり。亦曰。人無故不応餌薬。有所偏助則蔵気為不平とといへり。張潔古も病なくして薬猥服すれば事なき処は事を生ずといへり。又遵生八牋に人の寿命は。草木禽獣のよく延る所にあらずと載り。貝原先生も。人の身を生ずる門にて。養生の道を努むべし。針灸と薬力をたのむべからずといへり。然るを病なくして薬を服しをこのむ

病ひ愈ゝ薬をすごす時は。性命を害する事多し。能くしれる要見事なり

劉仲達曰。凡人有疾苟無明医。不如静以待之といへり。又養生訓に。病ある時もし良医なくは。庸医の薬を服して身体をそこなふべからず。只保養をよく慎み。薬を用ひずして病のいゆるを待べし。如此すれば薬毒にあたらずしてはやく愈る病おほし。死病は薬を用ひてもいきず。庸医は病と脈と薬を知らざれども。病家の求にまかせて みだりに薬を用ひて。たは

人をそこなふ。人をたちまちにそこなハざれとも。
病を助けていゆる事をそし。古語に病傷猶
可療。薬傷最難醫。しかれバ薬を飲ことをつゝしミ
たまふべしとみえたり。又古人の言に病に死せ
ずして医に死といへり。誠に確論といふべし
無病なる人疾病をあらかじめ防べしとて中暑
せずして香薷散を服し。瘧疾をまつらハとて
草果飲を服し中風をおそれて豨薟丸を用
ゆる事多し。あれ明日ハ渇べしとおもひて。
今日湯水を飲がごとし必用ゆべからず。龔廷賢が

湯に煎じて薬に代るといへる事ハ大なる誤なり
先哲の言に無毒の薬といふともみだりに服す
べからず。病ある時ハ病を治すべし病なき時ハ
正気を破るといへり心得べき事なり
周伯器の曰貴人の病治しがたき三ツあり。群醫
所能をしらずして攻補まじへ施す一の難あり
下に遇に禮を以てせざる故にうけがはざる者ハ
往す。往ものハ世に衒乃ためあり二の難あり。人々
惟にたいふて悦ばを常とするより。其欲を禁するに
何ごとも三乃難なりと續醫説に見えたり

本邦の世の貴人も病ある時ハ周伯器のごとき
所のごとし。故にありてなきに至れる醫者の常に
側に侍りて服薬飲食する事ハいふまでもなし。いさゝかも
養生にかゝはる事を犯す時ハ何によらず能否を
陳説して取あつかふにより。高貴の人に夭殤多し
醫を選ぶ事はつきにあらずんばいかでか縦令乃
患ひをまぬかれんや。昵近の人それ等をつきつけべし。
すべて貴人は病に至らず。我身の過りを知りて
過しなば世の通患なり。或国乃守の曰小身
なる者は明友傍輩ありて我に身の善悪を

いふより。非をいましめ慎むもの多し。是小身者
の徳なり。大身なる者は明友傍輩もなければ
絶て身の善悪をいふ人なし。朝暮に家来のこなれバ
只気をあつかふをもつて忠臣となり
といふて御髭の塵をとるものあり。故に我身の非を
非と知らず。非と知れども改むる心付なし。過する事
多し。是大身なる者の損ありと或書に見えたり。
此即周氏の論に似ていとたのもしき教訓なれば
あはれ知らしぬ
世の人ハ智恵充満し萬事むつかしに勝し

抑は芸道いろ〳〵といふに文武の学を始論。凡
百工の技藝まで。名人上手の夥しき中に日々
なまじく流しおけ童男童女の藝をなせるに琴碁
書画いふはさらなり諸の藝能に奇才の童子。
近来のごとく多く出来るを慶元已降いまだ
聞ざる所なり。人に古今の殊なる事あるべけんや。
是まつたく師の教導の功者になるゆへなるべし。
然るに時勢にあり然れども只疾病を療する
一事のみ昏迷にして定かならざる人のみあり。
まづ醫師の良拙を絶てしらず。其ゆへ病ある時ハ

狐疑深くして。良醫の薬もはじめ効をしらねば
其薬を服せず。俄に神佛を汚し祈祷の御鬮の
符章のたぐひをさへ頼あり。或ハ巫覡の言に任せ
方角の吉凶にて醫者の良拙のさうちもなしに
委るもあり。又病人をこしの悪症とあやまらせて
ますし。震慄してたちまちに醫者を替て薬を用ゆ。
其中にハ寒薬もあり温薬もあり。治法雑乱し
いたりて遂ハ難を治しがたし。此害ある人
富家に極てあるべきものにしるしなり
富貴の家に病ある時は醫師を大勢まねき集め。

談論して薬剤を處し。是を談合配剤といふ。病人を大切にするに似て却る麁末にあるとおもハるゝところなる事の至りなり。又医者の中にも便佞なる者あり。阿諛の者あり。欺詐なる者あり。孟浪の者あり。故に會合の席にていさかひある者ハ己が不善なる説を立て人は善に與せず。いさかひなす者ハ己をまげ口をつぐみて人に阿ひ。我身を後にして人を先にするなり。是皆庸医名を医に託するの徒にして。実なる者ハ少なれど。談合配剤却る病家の大なる害となるなり

今の世高禄の人。医師を新に抱ふる時。其学ハ志儀も功者不功者をもしれざる事により。病に業とする処なれば。えらみ嫌を正さんと。只侍医に命じて上手下手を選するにより。我に親き者をバ下手は上手と称美なし。我に疎き者をバ上手をも下手とそしり。故に良医とはかなふるもありし。すべての世の人も我にまさりし者をえりて嫌ひ我に劣て怠る者をあひし悦ぶ人情傷へきれありあらずや。その弥をし何故といふ人を人を選に其同僚の者にとふては善悪不分明なり

とて。文吏を選ぶには儒者といひ、儒者を選ぶには
文吏にといひ。あちらこちらの参検せしと蒙求に
載たり。医をえらぶにかくまでにはなけれども
せめて妾を抱へるごとくに選べし。妾をかゝへる、
には容貌は勿論諸藝ある迄も甚しき人沐浴
吟味といふて裸にして身の内の疵までを改る
よし聞およびぬ。然世の事なるや或高位乃家にて。
上手の小児医師ありとて抱へるに。却てそれより
君達姫君たち多く失なひたると也。亦一大家にて。
良医ありとて薬取は市をなし。諸人の耳目を
驚せし医師を抱へるに。其齢不惑を過る病おこりて
身まかりぬるよし。命は寶の寶なりといへる大切
なる我身を下寿ともならず失なふは医の過ち
とかけてあらされどもあり。素問曰。飲食有節。起
居有常。不妄作労。中略精神内守。病安従来
とみえたり。又唐医が偶中より。俗人など迄
用ひらるれど己も上手と心得。己が知らぬ事は云ど
も。良医の所為をもかれこれとなぶりそしり。そのれ
一人良医のやうにたかぶりかたる。是等の寒医乃
者あり。かならず短命なるなり。志らぬにあらど

かゝる者の子ハきはめて無能放蕩にして。早く
家を失ふ事と天数といふべければ。年来日頃
人を害なひ人に損をかけし陰悪の積て天の責
たまふ所なり。天誅をかうふるといふべし。亦元禄
の比までハ。貴人の疾病ある時ハ。脈案をかゝせ
おかれて用ゐ給ひけるよし。是等医案ハ治法
を調てきかず。其良医しともてはやすは弁舌
利口にて人情によく世事に熟し。内に医学に
実なくして外に君子の容を飾る徒多し。故に
医案の治法をのづから絶しも理りなり

養生訓に。山中の人多くハいのちながし古書にも
山気ハ寿ながし。又寒気ハ寿ともいへり。山中ハ
さむくして人の元気をとぢかためて内に
たもちてもらさず。故に命ながし。暖なる地ハ
元気もれて内にたもつ事すくなくして命
みじかし。又山中の人ハ人のまじはりすくなく
しづかにして元気をへらさず。万ともしく不自由
なる故をのづから欲すくなし。殊更魚類まれに
して肉にあかざれバ是山中の人命ながき故なり。
市中にありて人に多くまじはり交しげゝれど

氣へ入。海辺の人は魚肉を常に多くくらふゆゑ。病多くして命みじかし。市中にあり海辺に居ても。慾をすくなくし肉食をすくなくせば害なかるべしと見えたり。能く心得べき事なり

薬に有毒あり無毒あり。医者の用ゆるやうによりて効あるあり。砒霜斑猫も人を生し。人参黄芪も人を殺す。其考案容易ならぬ事にして医者も良拙あるになり。されば薬を服せざれバ中醫を得と古人もいへるは是薬をおそれて服さぬよなれば庸醫の薬を用ゆるをおそれてなり。

おほよそ病に察し易きあり。庸医も誤ることなし。又察し難きもあり良医もたやすく得ることあり。されども病に臨て是をはかりしむ能で人を殺す其罪すくなし。庸医ハ是を臨ます。はかりしらずして人を殺すの罪おほいなり。病家の人はよく心を用ひ良醫を選び後薬すべし

熱症の病人よきぬあつく差せ口へ生冷の類の物をもらしもあるべし。禁止する事を俗人を分論医者も是とあらそふ者多し。然るに卑賤孤獨の者。冷水性物ばかり飲食し。薬を服して

平復する者も亦多し。即冷水冷物ハ薬となり
毒薬なり。世人冷をいふるの妙をしらじてあやしミ
おもふなるべし。傷寒論に欲得飲水者。少少與飲
之令胃氣和則愈と見えたり又張戴人云傷
寒わづらひに薬を用ゆる事なかれ。惟冷を飲を最も
妙薬とす。但あれバとてやたらにも宜しからずと
儒門事親にいへり。香川先生も新汲水を白虎湯
なりといへり。又醫説に陽症の傷寒を煩しもの。夜
池の辺に伏し水艸を身にまとふて治せしとあり。
又傷寒服薬を撰て神気困重脉沈伏して夢中に

あり。死に垂とするもの七日已後に獨参湯を
井水に冷して後も鼻頭に汗出彌生じて立
ところに愈。神の妙方なりと聖一選方に見えたり。
赤熱症にて解しがたきものハ新汲水へ衣裳を浸し
被せたるを妙とすると霖夢弼も云り。仏説にも熱病
煩悶する者に呪を誦して浄水を（誦呪ハ仏家の先なり　良医の用ゆる所にあらじ）
飲ませれバ病ひ速に除愈すと却温経にいへり。
故に冷水を用ゆるにハ能く心得べきなり。徐春甫曰。
凡飲水後寒戦交作汗出為美此為欲解而即
愈也といへども悪寒ありとも必驚べからず次題及

水

水を望むものに。病は浅深虚実にかゝはらず新汲水を飲するに効を得ることおびたゞし。およそ疑あるべからず。又もし冷水を禁ずる醫者ハ医の道を絶て知らざるなり。其薬紙披すべからざるべし。水戸義公の命ぜられて刊行せし救民妙薬集といふ書に。寒三十日水を二口三口づゝ服すれば。一切病生ぜず。目歯にもよろしき薬なりと見えたり。是最上の妙方其験たのもし。寒三十日に限らず寒冷つよきうちハ猶もよし。小児ま用て一入よし。疳気は病を生ずることかつてなし。佛家にも

是に似たることあり。毎朝増恵陀羅尼を勤誦して。新汲水を一碗づゝ服すれば。智恵を増し記臆よく病ひ生ぜず巨益ありとて。真言宗の僧徒に飲むもの多しときけり。諸儀軌といふ書より出て伝ることゝ或僧の語れり。さもあるべく。世俗ハ簡易なる薬ハあしくとおもひ。只これを某法印の家方。是ハ一角入或ハ一粒にて圓金一片などいふ薬のたふときとおもひ價の賤き薬にも奇妙の効あるをしらずして。得がたきの物をたふとむ庸人の情是非なき事なり。孟子乃事在易而求諸難といひしもむべなり。薬を價の

高下にかゝはらず病に用ひて其病を治する事を良薬と
いふ。價の貴重なる薬ばかり病が愈るにもあらず。
高位の人に死といふ事あるまじ。たまたま病ある時ハ
世に鳴る程の医師が診治して良薬妙剤を處し。
一角を浴斛におしらへ。人参ハ自然汁を湯に
して。沐浴するもまゝある事に却る高位の人に
夭札なく天年を保なふ人ハ世に稀なり。
又貧賤なる者窮郷の人ハ價の高直なる薬も
用ひず。薬物に縁なく医師ハ薬も飲ざれども。
人躰もつよく病もなくあり。されども爛腸の食を

くらハず嗜慾におぼれずしてなきけれバ。生れつから
身に病なく命ながし。必しも價の高直なる
奇薬名方の妙なる能を頼べからず。金ハ尊けれ
ども鉄の益ありけるに及ばざる理り考へ知べし
山野に住る獣ハ。年月といへど何くしてある物も
くすりもなく。医者たのむ智恵もなけれど支離も
見えず。又人の飼なる獣ハ病もあり死も
まゝやゝあり。莊子養生主に見えたる沢雉の
譬もまた同じことわりなり。人ハいきとし
いける類の中にたふときものなれど養生ハ

道をしる獣にしかずといふべし。李梴が云。保養ハ不外日用食息而為人所易知易行といへり。養生ハ術とて巧を重して志ばかれしやうに用心すな。むづかしきことにハあらず。昔丹波ハ経長といひける名醫ありけり。或人長壽乃術をとひけるに。只別の術なし。少食と野雪隠となり外ハあらずと答られけると也。凡天下ハ物ごとに其性にあらざる事ハ天命を達ぜぬといふなる。呂覧に曰。人之性壽物者扣之故不得壽といへり。又養生類纂にも。人生れて命に長短ある事。

自然にあらば。皆身ハ不謹故をこなふによりて百病生じゆくに其壽を縮むとみえたり。養生訓に短命なるハ生れ付て短きにあらず。十人に九人ハ皆みづからそこなふなりと記せり。是命ハ長かれんも短かれんも皆わが持にあることなれバ。養生の道に精神をやしなひ天年をたもつべし。古人も壽ハ百福の長にして是より重きハなしといへり

西川といへる長崎人の作る草紙に。淮南子に寒國ハ壽多く。熱國ハ夭多しといへり。按ずるに

壽夭ハ國の寒熱によることなし人の質稟養生に
よれり。文華の風俗にて大酒肉食の大過に
依て夭死するものあり。紅毛人其本國ハ北國
寒國なりといへど。咬𠺕吧國の大熱國に居住し
て。本國の酒肉を大寒地のごとく飲食するが
ゆへに。紅毛人壽命五十歳に及べるものなし。
多くハ三四十歳にて夭死す。本國にて長命な
るありとなど記せり。又或人のはなしに。西國に
一向宗の寺あり其末なる門徒山家と濱辺とに
あり本寺にて法會の時ハ山かたと濱かたと

席を分けて列座也。山方ハ老僧多く濱方ハ
若僧多し。山方の僧一代まで濱方の僧をば
二三代も見數ふといへり。此等の事を考へ案
して養生すべし

世俗寒まへありとて灸をするもの多し。冬月ハ
急病にあらずんば針灸もすべからず。殊に十二月を
忌む。又冬月按摩をいむと古人もいへり。
むさとなすもみだりなるぞと養生訓に出たり

諸瘡腫物にも灸をよくすべし。湯薬膏薬より
其効もみやかなり。別て癰疽にハ灸にまさる

捷法(シヤウハウ)なし。項(ウナジ)よりこへかけて三里氣海に灸すべし
と。諸の方書にミえたり

金瘡を燒酎(シヤウチウ)にて洗ふといふ事あり。今世の外科は
なほ外科のよくする事なり。予外科は術をしらず。
されども家世の醫の所為(ワザ)を見しるに。酒を手引
ぎんにあてゝめ手巾(テノゴイ)ふの物にて。ぬまり乾血(カンケツ)を
拭去(ヌグヒトル)ものに用ゆる事あり。又一流に酒を用ひず。茶湯
を用ゆるもあり。然るを自己(シユ)流の外科はいかゞといふ
いふゆへ。衣類を洗濯するごとくに心得すれば
あり燒酎を用ひ洗ふと病人も損(キズ)なるしむべし

淺疵は害もなき事なれど。深疵は却る害あるが爲に
命期(キ)をちゞむといへり。金瘡あつかふ
外科の良(ヨシ)拙(アシ)を選(エラ)ぶべし。燒酎抔用ひあつかふ醫
ありて。斟(シン)酌(シヤク)あるべき事なり

狂犬(ヤマヒイヌ)に咬(カマ)れし人ハ。急に艾炷(モグサ)を大にして數十壯
灸すべし。極て死の難をのがるべし。聖呂実夫が云。
百日の内毎日灸すべし。一日も欠る事なかれ。是第一の
良法なりと。又香川先生も灸為第一上策。其次用
白虎湯大承氣湯之類と説てそへて。咬逆
毒ある時。傷(キズ)いまだいえず。やがて急發するなり。輕犯

まに木のひきゐそろまして。終に余とうしるゝに人たねし途に絶えり。世上に名方ハ家方のことゝいふて。大毒ハ薬となしあれどもこれも験を見ずまで灸治をするとし。且上手ハ醫師をも招き湯薬を用ゐ通し。灸もはじめハ身どきを熱痛をたへがたへぞ。毒の通く深重なるをおそるべし

毒断の事医者よくいふにあまりどさのゝかれを是をと。心をくるしめ穿鑿するにハいかにぞ。况て腸胃に熟習せし物を有毒の物もあらうかぞ。俗にも好物はたゝりなしといへり。喰あまざる物ハ無毒の物も毒となるも。故に他國へ行と水土かはりて朝夕に飲食にさへ。慣なれざる食に当りてわづらふ人あり。庸醫ハ病家を欺き知らざる事をしるとし脾胃のすき好むものハ。補ひをすけとあるをしらんば。もし毒断をいふ人あれど。忌詞に是ハふ説し彼をいむしと。良毒のごとくいひきらうある様にて。口辨をもっていひ紛らして禁忌をしめる。己が日毎に用ゐ熟食ぢから比所ハ菜物乃主治さへさぐりにしらずもあらん。数多の食物ハ能毒は遂一に辨知せんや。是盲者と啞者との説話に似て。

さる人もかゝる者もとより不明なり。大抵病人
なをかし毒物にても口腹に合ふ品物を食する
が。庸医の薬ハ用ゆるより遥にまされり。李笠翁も
本性に好けるものハ薬にあつべしといへり。
食を以て生を養ふ理り宜なる哉。
疥癬の類に。敷薬あつて薬等用ひかられ。
年久敷煩ひ苦むといへど。性命を害するに
あらざれ。速効をとらんと外より敷薬を用ひ
急なる時ハ。其毒内に蔵し変じて腫満となる事。
於て紀時ハすくひがたきも多し。まゝて命に

係らぬ病ハ。必療治を急ぐハあしゝと心得べし。
傷寒瘟疫の類ハ療治をいそぐべし。荏苒として
余りに逐くする無れ
貝原先生の曰。泄痢しまたハ食滞腹痛に温湯
に浴し身体をゆるむれバ気めぐりて病いゆ
るしるしあり。初発の病にハ薬を服するに
まされる事あり
古諺に。病ハ口より入り禍ハ口より出るといへり。誠に
格言なり。今世の人を見るに飲食ほしい
まゝにする事言語に絶たり。故に今内因の病を

患ふの飲食にやぶらるゝが多し。達生録に曰。
四百四種の病宿食を根本とすと見えあり。又
邵堯夫の詩に。爽口物多終作疾と作れり
古今医統にも百病の横夭ハ多く飲食によると
いへり。宇治田先生の云。其害ハ大なる物ハ人
是をおそれ。其害ハ小なる物ハ人是をおそれず。
養生ハ道ハ其要小なる物を戒るにあり。医ハ
只大なる物のミをいましむ。故に世人小なる
物を見て。いよく是をあなどりて。積て遂に
病となる事多し。今ハ世病者の多死も大半是

医乃志ならざれバ。たとひ奇薬妙方ありとても
早く養生の術を教ゆる志なしといへり。是皆平日ハ
飲食をつゝしむのいましめなり。前ハ毒踏の際
と混同せられん
桃源遺事に云。無病延命の術。禽獣にならふにしくハ
なかるべし。禽獣ハ飢て食し飽てやむ。欲発して
淫し慾たさまりてやむとミえたり。誠にとるべき
至極の事なり
黴瘡ハ薬を服するにあらず。日数むきしれをつとめて
其効験をあらはすなり然るに病者ハ性貪急

にして薬効はなく変事なけれども服さず俗説にまどはされ俄にいやさんとて。賈醫乃薬を用ゆ痼疾癈人となる者多し。庸医賣薬の黨は速効を好み手際を見せんと。軽粉銀朱の剤おそれもなく用ゆるより。一旦瘡は速に愈れども毒氣肉に欝し後日かならず便毒を發し。亦は骨痛となり不治乃症となりて八聖薬神医もあれど治するに難し。おそるべき事なり。都て賈医を醫経をしるよくよくて。人はよくふに志なくして人の欲に進しき

をしらざれど。病者の後日は災となるをばいざしらず。も貪着せず瘡を早く愈し手際を見せるは者一とし。をいふくの巧み方便は数し。人をたぶらかして。金銀を納るの計をめぐらすなり。又極悪は営みて瘡は愈し後に便毒骨痛となる事をかねて合点すれども。やはり薬料をむさぼる事を手段もあり。時者は一時は快を見て終身の大害をしらず。是初瘡の速に愈しは。神明のごとくに何が免ぞふとくこと。終に命を失す不去あさましく数へがたし。恐しむべきのまぬ形ぞ

朱丹溪の陽有餘。陰不足の論。張景岳乃陰有餘。陽不足の論。孫真人の腎を補より脾を補益しといひ。許学士の脾を補より腎を補べしといひ。或ハ頭面ハ諸陽の聚會といひ。痢病の赤ハ熱白ハ寒といへる類。是皆其説ありと詳く論ハ論をかさねて理のごとく見ゆれどもいづれも無稽の妄談なり。諺に鋸屑もいへばいちまとゝふがごとし。理ハいひやすく事実ハ得がたし。邪路ひとの僻説をはけしく。理のいひ易き事をさとるべし。今天気ちれもぞ寒ずる故。圊へ行裾をまくる。

尻をまくりもせども。寒気堪がたしといふ人もあり又圊に久しく居てハ。寒気にあてられ病なる人をときゞ見。是を以てかくして頭面を諸陽の會といふべし。病事ハなぞつゝまぬといふても可ならん。されども揺動するものハ陽気つよしとしるべし。車夫輿隷がごときハ冬月も裸にて汗をながすがごとし耳目鼻口ハ常に動てやまぬ故に頭面ハ陽気を盛あり。夏の夜ハ蚊も起居する中もさほど邪魔にもならぬ。寐とうるさし。素問にも虚のある所。邪かならず湊といへり。華佗の

曰。人體欲レ得ニ勞動一但不レ當レ使レ極メ耳といへり。又
保養の説に流水くさらず戸樞虫くはざるを
動くがゆへなり。形氣も亦然りといへり。古今の
医哲らのはなしを丁寧を尽しぬれども。さて
理屈むづかしく。迂遠の事は紙上の
空言なるもあり。人を惑するなりければ。まして
今世庸医のいふ事を必信ずべからず

論語に子之所レ慎齊戰疾とあり。疾とは聖人の
疾をつゝしみ玉へるなり。世人も疾を治しまさには
なる称ど思ひして医薬をもちゐる事の道を失ふ

事多し。まづ医師をもとむるに學の精粗功の
多少を問はずして。只名をとひ師を問ひたまふ
とし。世ば欺の時に遇て權貴の家に出入し。便佞
にして名利を得る医者をもとむるなり。ひそ峻剤を
おそれ。平和の薬を用ゆる醫者にあらざれば其薬
を服さぬ人なり。また病に治し易なり治し難あり。
其治し難きものは良医にかゝらざれば必治する事
なきなり。故に醫を選ぶには其学術を第一に問べし。
又医師を轉ずべき時なり。轉ずまじき時なり。
薬効を得ると瞑眩とて。病すゝむに似たる事なり。

是轉違比に似て類べからざるなり。或ハ病に標ハ
似て其本ハ非なる類ものあり。是試あつ如く人に
某某の医某某某れ病を治す。病症もこれも異なる
事なしといふ。されハ病状の似たる類なり。地に南北
高低あり。人に少壮貴賤ありて病に虚実寒熱
あり。生質の同じからぬを知れ其面のごとし。
必ずハ一面のミにかかるべからず。褚澄乃云寡婦
尼僧の療治ハ妻妾に異なりといへり。病家ハ
親族よく〳〵心得べし
東都郊外の巣鴨村といふ所に予が知れる中田七郎右衛門

といふ農夫あり。年齢七十最耳目聡明に
して康健なり。其婦男女の子九人を産ミ嫡子
三十三歳を始とし末子十四歳まで何れも無病
壮く才にて身に灸治の痕一ツなく服薬せし
事もなし。されども親子十一人の大勢なれバ
無事しく煩ふをあまりど医薬を用ゆる事
にも及ばず。勿論其妻孫に小産もせず。親子皆
愿朴にして公役にあらざれバ夜行せず。遠方へ
仏神まうでもすれど黄昏をかぎり家に帰る。家僕朴
なるも純村に名あり。此農夫にて鍼灸も薬を

見ざりに庸醫に委任かゝるぞといふ。予が言乃妄
ならざるをわきまへしるべし
貝原先生の養生訓。香月先生の老人養草といふ
書ハ。養生の術乃縕情を竭しあるされあり。熟読
して君親の疾病あらんやうに。医を選び孝
養するべし。又我身も病をおこせし時のかなしさが
勤におこたらずして養生の学に懈無あり。又
香月先生世人の慈幼におろかなるをうれひ。小児
養育草といふ書を作まれり。小児のある家にてそ
なへのふべし。小児の病を詳に記せり。三書とも皆

國字にて俗に通じやすくかゝる者なれば
婦女も家にのみ居て外に出ざれば気のとゞこほる
かゝりしかり。疾病を生ずる事多し。されば
つとめて身を動かして気を順らすべし。都て室女
婦人の病に薬を用ひず鬱滞の気を散ずる方便
にて気の病なり。それを病家ハ多く偏医も
薬をもってハなほらぬるためもひとつもちて薬剤
を用ひ。却ておもひよらざる事に至る者なり。古人
も病に死せずして医に死するといへり能々心得べし
姙娠いはるゝ常なり。
神功皇后新羅を征伐まし

まゝ略語びなふより。櫨(ハジ)輿(マル)と云伝へて舊(フル)記
囲(ナフ)風(ハジ)ありを後にしも後世ハ用ゆるとみえて。
奚(ケイ)囊(ノウ)便(ベン)方(ハウ)に姙娠の帯ハ本出より。然者驗
なのふ腹(ハラ)帯(ヲビ)をしめぬふ産がらに孕る婦人ハ役
にして病にかゝりに。既に邉(ヘン)鄙(ピ)にハむすばざる
所もあるとぞ。胎(タイ)孕(ヨウ)をまりいたく気血ハ盛
なるになり。腹(ハラ)帯(ヲビ)を結びてハ氣血乃通ぐを
なからん。いんとすれば世(ヨノ)常(ツネ)人手足を縛(シバ)り
晝夜もさけむ痞満しておやむ。是氣血凝(ギヤウ)滞(タイ)
すれども。畜(チク)類(ルイ)の一産に多くつゝ孫生(ウメ)

どもも難産の患なき理(コトワリ)なくしてそとしはかり
しるべし
極(ゴク)秘(ヒ)ハ巻(マキ)といふ書もあれ本に。婦人安産の
妙(ミヤウ)秘(ヒ)術(ジュツ)と題(ダイ)して。安産ハ法ちく数にあらふり
たくりけり。為獣畜類数(カズ)多く毎年子を産ども
難産なし。然るに人そこあれに慾(ヨク)火(クワ)を動(ウゴカ)し。
坐臥ハ夜なれに身よ按(アン)摩(マ)とちもやし。移日(ヒメモス)
産(サ)して奴(ヌ)婢(ヒ)のそ日つかふゆへ食氣もめぐらに。
いとまなるままにせく物たまひがちに。産の事
のみ氣ばかひて。氣も滞(トドコホ)る母へ難産をなる作る。

いねるに側ざらす。起に躍せしむも。灸家にハさのミ
かまはぬをなれども難産ハなし。甜瓜ハ自然と
熟して落る時節を待。必しも努力て急に産む
るゆゑなり。にて蚤かくるは今ほどの足駄をはきて歩
むぬ用心。高き所より落ざるやう。身に痩せぬ
ちからわざを慎むべし。是皆安産の秘伝なりと
哉あり。誠に妙秘術なるべし

姙

婦臨産の時催生といふて服薬せしむる風俗
となり。此催生薬ハ産せんと欲し。児の頭産つるに
事わる時に用ゆべし。産婦苦悩もなくハ用ざるが
よし。然るに庸医ハ産の気付くと其儘催生薬
を速験をとらんと卒尓に滑利疏導の薬を用ゆ。
却る薬毒に犯されて難産する者多し。孕ハ婦人
の役にして。病にハあらざれバ生まじきといふても
時刻くれると必分娩するもの也。昔影鶴卿の妾丹後
の局孫三姙娠ありけるに障ありて。営中を出て摂津国
にさまよひ来り。住吉の社地にして産所にまふ
けもなく。島津氏の先祖忠久を誕生ある。今に
住吉に誕生石とて其跡あり。諸人皆知る所也。
産ハ栗柿の熟して落る時節ハおのづから

落るに同し。分別くるしれバ邪智を用ひぞ。自然と
生るゝを待ずとくいきみなどさせされど難産れ
うれひ露藥なくあくまであれそれを産家
も功偏医者も藥力にかゝはされどうまれぬと思ふハ
むげに狹くあり。元し日を經る事久しくして。
産婦困倦し産下せざる時ハ藥を用ひ元力を
出すを速生れ法をおこなふ也。止事を得ざる
の術なり
病困老ハ胎ハ血を車あして出るものなり。其血
ばかり先に多く出るハ。胎いづる路乾燥し難産に

至るもの多し。故に治方あるべきなれバ元来
天地自然れ妙にして生れつかるゝまゝなるなれど。
何の治方かあらんとみえたり

同

同書に姙の内にある腫気ハ。産するとおのづから
消ぞ。又消せざるもあり。姙娠の内ハ其治を
なさゞれども大方ハ若しかゝるぞ。瀉のあるも
灸術の家までハかまはずといへどもなる家あれど
若しかゝるぞ産科の家にてそれを治せんとして
いろ/\の藥を用ひ。却る他の病を引出し
小産などする事もありといへり

医説に婦人の疾産蓐より大なるはなし。金瘡に庸医のあやまちに殺すもの多しとあり。又痘科鍵に痘後は結毒痘の毒にあらず。別医は毒となりと説り。痘疹結要に。寒気暑気等は障なけれど薬を用ざるがよし。痘なれども一旦害ありて死に極るもの多しと記せり。産婦痘疹に限るぞ。諸病ともに医者のあやまりに却る死ぶる者多きゆへ。傷寒論はじめとし諸の医書に。医者がやぶりそこなふ事を多く載られたれば。薬を服せずして中医を得るといふなり。是が至極の上策と知べし

婦人良方に孕婦の不語は疾にあらず。薬を投ずるに及ばず。臨産の日保生丸四物湯は数服すれども。産後もなかなか語る事なし。自然の理にして薬は功にあらずと見えたり。今は世妊婦の不語あれども無勢の家といへども騒動を現す人無家にてそおそれ病とあり。倉皇さはぎて庸医の薬を用ひ却る其害多かる能し

慎むべき事なり

産婦の疾病小児の疳疾医師の法則とする内経に見えずといへども物欲の傷きをなすとおぼしきゆへ

なるべし。今邊鄙貧賤の家を見るに。産の心もちなるを
いぬふせるの産に似たり。難産の患ひなきも多くハ人
たふときの家ハ安閑無事の婦女に多し。又小児の平安
なる類ハ父母の疾病なきにもよるなり。麻疹ハ甘肥の
物に傷れし病なり。上古恬憺の人ハ飲食節し。
故に此病を患ふる事なし。今世とても藜藿を食
ふ賤しき者の兒ハ此病を煩ふる事稀なり。疾病
なからん事をおもハゞ。上古恬憺の人のごとく
心長なるべし

養生嚢巻之上　終